

帰　り　花

— 季節はずれの花について —

吉　野　政　治

はじめに

時ごとにいや珍しく咲く花を折りも折らずも見らくし好し
も
(萬葉集・卷19・四一六七)

八千種に草木を植ゑて時ごとに咲かむ花を見つしのは
な
(萬葉集・卷20・四三二四)

時を違えることなく咲く花を愛でる感情には、やがてはそれが散ることが前提としてある。世阿弥の『花伝書』に言う。

「そもそも花といふに、万木千草に於いて、四季折節に咲くものなれば、その時を得て珍しき故に翫ぶなり。(中略) いづれの花か散らで残るべき。散る故によりて、咲く頃あれば珍しきなり」(別紙口伝)。そうした花々の開落によって感じ取る季節

感には一種の哀感が漂っている。それは自分もまた自然の一部であり、やがては過ぎ去る存在であるという認識もあるものと思われる。前拙稿^{〔1〕}では、そうした「時の花」で綴られた「花暦」に込められた人々の思いを窺ってみたが、本稿では季節はずれに咲いた花について取り上げてみたい。人々は「時ならぬ花」をどのように見てきたのだろうか。^{〔2〕}

1 上代の「非時の花」

上代文献に現れる季節はずれの花は以下の数例だけである。歌集の『萬葉集』では次の二例あるいは三例が見られる。

吾がやどの非時^{ときじま}藤のめづらしく今も見てしか妹の笑まひを

(巻8・一六二七)

この歌の左註には「天平十二年庚辰の夏六月に往来せしものなり」とあり、春に咲くべき藤が季夏に咲いたのである。一首は「わが庭前に時節はづれに咲いた藤の花のやうに、珍しく愛らしく、今も見たいものよ。あなたの笑顔を」（澤瀉久孝『万葉集注釈』口訳）の意。この「非時」は「その時ではない。季節はずれ」の意であり、『古事記』また『日本書紀』の垂仁天皇条に見える「非時の木の実」（橘）の「時を定めぬ。常にある」の意とは異なる。次の例も同様に季節に遅れて咲いた花を珍しく心惹かれるものとして詠ったものと考えてよいかもしれない。

この山の黄葉もみぢの下の花を我小端はつばに見てなほ恋ひにけり

（巻7・一三〇六）

次の例は左注に「六月十五日、芽子はぎの早花を見て作れり」とあり、秋に咲くべき萩の花が夏に咲いたのは秋風の立つのを待たずに咲いたのだからというものである。

吾がやどの萩咲きにけり秋風の吹かむを待たばいと遠みか
も
（巻19・四二一九）

歴史書地理書では『古事記』『風土記』には季節はずれの花は現れないが、『日本書紀』に次の一例が見える。

天皇、両枝船ふたえだふねを磐余市磯池いほに泛うかべ、皇妃と各おのちあひわか分わかり乘りて遊宴あそびたまふ。膳臣あられし余磯あ酒を献けんる。時に桜花、御蓋みかさに落つ。天皇、異あやしびたまひて、則ち物部長真胆連を召して、詔して曰はく、「是の花や、非時ときじくにして来る。其れ何処の花ぞ。汝、自ら求むべし」とのたまふ。是に長真胆連、独り花を尋めて、掖上室山に獲て献けんる。天皇、其の希有めづしきことを歎なげびたまひ、即ち宮名としたまふ。故、磐余いはれわか稚わか桜宮さくらみやと謂まをすは、其れ此の縁なり。是の日に、長真胆連の本姓を改めて、稚桜部造と曰ひ、又膳臣余磯を号けて稚桜部臣と曰ふ。
（履中天皇三年十一月六日条）

「其の希有めづしきことを歎なげびたまひ」とあり、この「是の花や、非時ときじくにして来る」の「非時」も「季節はずれ」の意である。その珍しさゆえに、新しい宮居を稚桜宮わかさくらみやと名づけ、桜の木の在処を突き止めた者の姓を稚桜部造と改め、酒を献けんつた者にも稚桜部臣の名を与えたのは、西田直次郎氏の言われるように「この宮居にも、これらの二つの氏族の家にも稚く咲く花のようにこいねがわれた」ものと思われる（『咲く花の呪術』「史窓」十四号一九五九・三、『日本文化史論考』吉川弘文館発行所収）。
以上が管見で拾いえた上代における用例のすべてである。用

例は少ないものの、季節に遅れて咲いたものも先駆けて咲いたものも見られた。もとより季節はずれに咲く花は常に見られるものではない。したがって、それを珍しいと感じることはどの時代でも同じであろうが、季節に先駆けて咲く花を将来の栄えを意味するものと捉えている例があることに注目しておきたい。

2 王朝和歌の「残花」

王朝の和歌においても詠まれた花は、次節に掲げる僅かな例外を除いて、定められた季節のうちに咲き散るものがほとんどである。しかし、王朝和歌における少なさには特別の理由があるようである。すなわち、後に連歌において季題の「本意」と言われるものが既に王朝和歌に存在する。季題の「本意」とは「物がその特質を最もよく発現している状態をいい、題詠意識の深化に伴って歌人達に共有されるにいたった、様式概念としての『事物の美的本性』」であり、「所与的な一定の観念形態」である。そのことは源俊頼の『俊頼髓腦』、藤原清輔の『和歌初心抄』、鴨長明の『無名抄』に論じられているが、連歌にもその「一定の観念形態」は受け継がれており、里村紹巴の『至宝抄』（天正十三年一五八五戌）の次の文章はそれを具体的に

記したものとして有名である。

たとひ春も大風吹き、大雨降るとも、雨も風も物静なるやうに仕り候ふ。(本意にて御座候ふ)春の日も殊によりて短き事も候へども如何にも永々しきやうに申し習ひ候ふ(中略)時鳥はすさまじきほど鳴き候へども、稀に聞き、珍しく鳴き、待ちかぬるやうに詠みならはし候ふ。五月雨の比は(明暮)月日の影をも見ず、道行く人の通ひもなく、水たんたんとして野山をも海にみなし候ふ様に仕ふる事、本意也。又、秋は常に見る月も、一入光さやく面白き様にながめ、四季共置く露も殊更秋はしげくして、草にも木にも置きあまる風情に仕るものに候ふ。されば秋の心、人により所により賑はしき事も御入候へども、野山の色もかはり物淋しく哀なる体、秋の本意なり、秋の夜長きにもいよいよあかぬ人も候へども、暁の寢覚に心をすまし、去し方行く末の事など思ひつづけ明かしかねたるさま尤もに候ふ。冬も長雨降る事候へども、時雨の本意として、一通り降るかとするれば晴れ(霽るかとするれば又降りなどして日影ながらにむらむら時雨)、冴え冴えし月の行く末に思はざる一時雨板屋の軒、篠の庵など音あらましき体仕り来候ふ。

又雪（は）遠山の端、奥山里には降りつもり、爪木薪の道もたえ、往来の人の袖も払ひかねたる折節も、都の空には珍しく初雪、薄雪など興をもよほし然るべく候ふ。

つまり、和歌や連歌における花は、現実がどうであろうと、本来あるべき形で咲き散らなければならない。定まった時期に花は咲き、型のごとく咲き誇り、そして惜しまれながら散らなければならないのである。花は季節を表す一種の記号であつたと言つてよい。したがつて、季節はずれの花は詠われてはならないものであつた。

ところで、そのように定型化した詠われ方の中において、咲き残る花（すなわち「残花」）に対する歌の多さは注目される。例えば、

新院北面にて残花薫し風といへる事をよめる

中納言雅定

散りはてぬ花のありかを知らずればいとひし風ぞ今日ほうれしき

（金葉集・春・七〇）

春をおくりて昨日のごとといふこと

源道済

夏衣きていくかになりぬらむ残れる花は今日も散りつつ

（新古今集・夏・一七八）

のような、散りゆく花を惜しむ歌である。これもまた、鴨長明の『無名抄』「題心事」に「命にかへて花をしみ、家ぢをわすれて紅葉を尋ねんごとく、その物に心ざしふかくよむべし」とあるように「本意」に沿つたものである。瞿麦会編『平安和歌題索引』（編輯責任者後藤祥子一九八六・六）によると、この時代の歌題に「残花」「残花唯一枝」「残花何有」「残花隔河」「残花隔霞」「残花止客」「残花誰家」「残花留人」などが見られ、さらに「残鶯・残菊・残月・残紅葉・残葉・残春・残雪・残水」などの歌題も多く、王朝和歌の美意識の一つの形として過ぎ去るものに対する哀惜が確立していることが知れる。漢詩にも「残花」は見られる。例えば、

鳥恋残花枝

（白居易「惜春」）

薄暮毀垣春雨裏 残華猶開萬年枝

（竇萍「上陽宮詩」）

旧蘭憔悴長 残花爛漫杼

（庾信「和字支内史入重陽閣詩」）

などであり、『和漢朗詠集』にも

紫藤露底残花色 翠竹煙中暮鳥声

（春上）

風荷老葉蕭条緑 水蓼残花寂寞紅

（同右）

が採られている。「残花」へ注目することにはこうした漢詩の

影響もあるのであろうが、花の盛りを重視するあまりに、言わば後ろ向きの思考になっていると言わざるをえない。

3 『金葉集』以降の季節はずれの花

さて、先に述べたように王朝和歌において季節はずれに咲いた花を詠んだものは極めて少ない。勅撰八代和歌集においては次の四例にすぎない。^(6.07)

① 卯月に咲ける桜を見て、よめる 紀利貞

あはれてふことをあまたに遣らじとや春に遅れてひとり咲くらむ
(古今集・夏・一三六)

② 百首歌中に杜若をよめる

東路のかはやが沼のかきつばた春をこめてもさきにけるかな
(金葉集・春・七二)

③ 二条閑白の家にて、人びとに余花のこゝろを

よませ侍りけるによめる 藤原盛房
夏山の青葉まじりの遅桜初花よりもめづらしきかな

(金葉集・夏・九五)

④ 草花先^レ秋といへる心をよめる 顕昭法師

夏ごろもすそのの原をわけゆけはをりたがへたる萩が花す

帰り花

り (千載集・夏・二一九)

①と③は季節に遅れて咲いた花であり、②と④は季節に先駆けて咲いた花である。①が「春に遅れてひとり咲いた桜の歌を夏の部に置き、②が夏の花である杜若が「春をこめて」(春のうちより)咲いた歌を春の部に置くように、これらはすべて季節の移り変わりをスムーズに示すために取り上げられたものである。

季節に先駆けて咲いた花を詠うものは、『金葉集』(大治元年

一一二六または同二年奏覧)以前の勅撰和歌集には見られない。また、季節に遅れて咲いた花を詠ったものうち『金葉集』の

③は、それまでの盛りを偲ぶ「残花」の捉え方(『古今集』の

①の例を含む)とは異なり、「初花よりもめづらしい」と前向きに詠うものである。

ちなみに、この歌の詞書きに見られる「余花」の語は、『金葉集』の選者の私家集『散木奇歌集』にも見られるが、勅撰集ではここにのみ現れる(「余花」については、なお後述)。また、同歌に見られる「遅桜」も勅撰集ではこの例が初出である。

『風雅集』にも「行きて見んみ山かくれの遅桜あかず暮れぬる春のかたみに」(春下・二八七、藤原長能)の例が見られるが、

そこでは「春のかたみ」としての存在であり、この『金葉集』のように夏の景物として捉えられているものではない。

右のような注目すべき特徴を持つ『金葉集』の歌風について少し詳しく触れておく必要がある。勅撰八代集と一括されるものにも、三代集とそれ以後で種々の変化があることは言われている。例えば『古今集』から『新古今集』に至る王朝和歌の流れは、第四勅撰集『後拾遺集』のあたりで一つの転換点を迎えたと言われる。それは王朝和歌の叙情性を継承しつつ、一面では三代集の世界からの飛躍であり、脱皮であった⁽⁸⁾と言われ、特に『金葉集』については、

たとえば叙景歌の詠法において、経信に代表される後拾遺集時代の新風を受け継ぎつつも、一方で『金葉集』は、当代を活写しつつ特異な一面を見せている。まず雑部下の連歌が注意を引く。連歌はすでに『拾遺集』に取り入れられていたが、それは王朝和歌とは別趣な、口語や俗語による世俗社会の提示であった。そこには単なる貴族趣味とは異なつた、民衆や土俗への関心の高まりが示されている。また、それに関わつて、和歌自体も口語性豊かな表現によつて、新たな新風を開きつつあつた。とくに恋部や雑部の歌

には、その傾向が強い。

と言われている。自然詠に限定すれば、散つた後の桜にまで及ぶ絢爛たる桜の美に対する讚美など、対象とした景物の最も美しい情況を選び取つて讚美する詠法を中心とする一方で「非伝統的景物をも美の対象に組み入れるという野心的な意欲」が共存していると指摘される。⁽⁹⁾②③の季節はずれの花に対する捉え方も、そうした「野心的な意欲」の一つと捉えられる。

こうした新しい『金葉集』の美の対象は中世以降に引き継がれていく。『金葉集』の藤原盛房の歌(例③)を踏まえたものと思われるものに、『中務内侍日記』の弘安十一年一二八七三月二十六日条の、

雲井の花みな散り果てたるに、春日殿へ御文の参りたる御返事に花を参らせらるるに、少将殿、小さき枝を折り具してことづけ侍るに、世にありがたき頃なれば初花^{はば}よりも珍しと思うに(中略)花の返事、

思ひきや稀なる頃の桜花君が情けを添へて見るほど
また、『平家物語』「大原御幸」にも、

庭の若草しげりあひ、青柳の糸をみだりつつ、池の萍浪^{うきなみ}
にただよひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかか

れる藤なみの、うら紫にさげる色、青葉まじりのをそ桜、
初花よりもめづらしく、岸のやまぶささきみだれ、八重た
つ雲のたえ間より、山郭公の一声も、君の御幸をまちがは
なり。

などである。さらに連歌にも受け継がれ、紹巴の『至宝抄』
(天正十三年一五八五成)に

春も末に移り行けば、徒に散り行く花を見ても世の中の
儂はかなき事を覩いづくじ、何にか残花のこるもあらむとあらぬ深山の奥
などに尋ね入るに、青葉をがくれの遅桜をを見ては初花よりも
猶珍めづらしくおもひ、(下略)

この「青葉がくれの遅桜」は、『金葉集』に「余花」とあつ
たが、「余花」は連歌・俳諧にも季題として用いられる。里村
紹巴の『至宝抄』に「余花」とは、若葉などに花の残りたるを申
候」とあり、『年浪草』(春三)に、

葉桜、残花、青葉の花 雅章卿口決抄に曰、残花と出した
るは春の中に久しく残るをいふ也。(略)残花・青葉の花、
春にして、余花・若葉の花は夏なるべし。混ずべからず。

とあり、『宗養連歌伝書集』にも「四月 更衣、時鳥、余花、

帰り花

若葉、杜若、卯花(下略)」とあり、江重頼編輯『毛吹草』(正
保二年一六四五刊)にも夏の季題「余花」の例句に「おちやか
しら夏の初花遅桜」「卯月にも心の花やささきの月」「積善の余花
ぞ有ける家桜」「言の葉も茂るきさまや花の下」「木許はかりか夏に
もかゝる藤の花」と見える。

また、次の『建礼門院右京大夫集』の文治二三年一一八五—
六頃に書かれたものと推測される箇所も、遅咲きの花を前向き
に捉えることにおいて『金葉集』の捉え方が影響しているもの
と思われる。

冬ふかき頃、わづかに霜枯の菊の中にあたらしく咲きたる
花を折りて、ゆかりある人の司召になげくことありしが言
ひおこせたりし。

霜枯の下枝にまじる菊見ればわがゆくすゑもたのもしきか
な

4 生け花の「帰り花」

中世になると「帰り花」「返花」「反花」「復花」とも表記さ
れる」という語が現れる。管見での初出は『松下集』に見える、
応仁二年一四六八に詠まれた歌である。⁽¹⁰⁾

婦り花

八

稀恋

(一〇七二)

おもはずよ時しも秋にかへり花ひらけて袖にうつすには
は (一一二九)

おもはずよ契はかなき山桜かへりて秋も花をみんとは
(一一三〇)

次いで三条西実隆の『実隆卿公記』に、

自三室町殿海棠反花付和歌被進之。

かはらじないづくもさかは立かへりうらなく匂へ軒の梅
が、 義一

御製御返し

かくうきめいましりそめつたび枕うかる、我し野原べに

しく草 (文明十七年一四八五 七月十日)

天晴、暖気如_レ春、桜樹悉付_二反花_一、尤有_レ興。

(長享二年一四八八 九月五日)

などに見え、飛鳥井雅親(一四一六〜一四九〇)の『亜槐集』
の詞書に、

侍従大納言実隆卿のもとより、信濃桜のかへり花の枝に

さして

待ちつけんの人のみがたき宿なれや年にまれなる花は咲け

り

かへし

めぐしき言の葉そへて待ちみめやとしに稀なる花しさかず
は (一〇七三)

とあるのも同時期のものと思われる。おそらく「婦り花」は
十五世紀後半に成立した語であろう。¹⁾

『松下集』に「婦り花」が現れるのは、『金葉集』以来の新
しい歌風の影響があるものと思われるが、『国歌大観』の索引
によれば、和歌中の言葉として見られるのはこの例の他には

『大江戸倭歌集』に見える安政七年一八六〇の詠の、

九月十三夜 光賢内藤

けふをまちあきの最中にくらべみる月はかつらのかへり花
かも (八四五)

があるだけであり、和歌の言葉としては定着しなかったよう
である。

注目されるのは、時代は降るが、生け花の世界では用例が多
く、その意味づけも注目すべきものがあることである。その早
い例は『天王寺屋会記』(宗及自会記)に、

① 「床 かふらなし〔蕪無(花入)〕、返り花之桃、生て」

(天正三年一五七五 十二月二十二日)

② 「床 かふらなし、帰花ノ藤、生而」

(天正十二年一五八四 六月二十日)

③ 「同〔床〕かふらなし、返花ノ藤、生而、」

(同年同月二十一日)

④ 「床 薄板ニ、やまふき返花、生而」

(同年八月二十八日)

⑤ 「床 かふらなし、くわりん〔花梨〕のしよく〔卓〕ニ、

山ふき生而 但返花也」

(同年九月六日)

⑥ 「床 かふらなし、薄板ニ、梅ノ返花、生候」

(同年同月七日)

と見えるものである。^(12.13)

生け花に「帰り花」が多く現れるのは次のような理由からで

あろう。

生け花(厳密には座敷飾花)の最古の伝書と言われる『仙伝

抄』(文安二年(一四四五)以前に成立)に次のように見える。

一 生花の事。春は夏の花、冬は春の花をたつる也。

一 死花の事。春は冬の花、冬は秋の花をいふなり。かくの

ごとく道理をもつて生死をしるべし

一 四季のうつりの花の事。春は冬のうつりをたつる。いづれも四季のこゝろへかくのごとし。

一 時の花をもちゆる事。下草にも。又野のなりとも。草花をたつるとも。客人上方女房衆などのかたへ。いかにも

いつくしき体になびけ立可然

時節の花を用いること、季節に先んじる花は好まれ、季節を

過ぎた花は嫌われる、これは生死の道理である、これが生け花に用いる花の基本である。これによれば、「帰り花」は「残花」と同じく「死花」である。『華道全書』享保二年

一七一七)に

○仏事は人の中陰か年忌法事の時の花也。白き花・枯葉など

のあいしらひ可然也。赤き花・紫の花・つばみ・咲かけの

花は用ざるなり。只かすかにさびしく見ゆる体よろしき也。

かへりばな、残花いむなり。請の枝をも手向の枝といふな

り。^(卷五「仏事の花の事」)

とある。しかし、「帰り花」は「残花」と区別され、生け花の

材として用いられることがある。

○城中・軍陣などにての花の心遣、口伝有之。帰り花をバ用

候。残花を嫌候ハ余花の事也(セツノチガヒタルハナノコ

ト也) (『専応口伝』天文十一年一五四二 自書奥書¹⁾)

○出陣(陣)の花の事。一切ちりやすき花をきらふべし。

椿・楓・つ、じ。その外しほれやすき草木をきらうべし。

立てて可然物は、かつ木、常磐なる物。婦り花可然也。

(『仙伝抄』前出)

○平生は立つといへども、祝言に忌む物。しおん。いちご。

一切婦り花。ただし、出陣には用べし。(同右)

○かへり花は祝儀に用、残花はきらふ也

(『立花初心抄』下・延宝三年一六七五)

○婚礼・首途にながしの枝を不用。婚礼にかへり花尤いむ也。

かどいで、病人本復の祝^{いよ}にかへり花は好^あみて用る也。

(『華道全書』卷五「祝儀の花の事」享保二年一七一七)

○婦り花祝儀二用残花ヲ嫌ふへし。

春さく花、夏さくハ残花なり。秋ハ珍花なり。冬ハ早

ざきなり。余是准へし早咲時節の花ハうちひかきたる

所に遣ひ残花婦り花ハ奥ふかき所に用又高き物なりと

も残花ハの節ハ少さけて用るなり是を残花あしらひと

云。(『立花伝大巻 要註』(作者成立年未詳)

これは「婦り花」という名そのものに関わり、生け花に用い

られる花は客人をもてなすためのものだからである。

時節に咲き誇る「時の花」は人事に譬えられるが(『海道

記』の佐夜の中山条「才身ニタリ栄分ニアマリテ時ノ花ト句シ

カバ」などが早い例であろうか、「婦り花」もまた返り咲きと

いう意味に掛けられて人事に譬えられる。既に『松下集』の

「婦り花」の例も「稀恋」という詞書のあるものであった。

生け花においても言葉に対して敏感である。『仙伝抄』に出

陣の時には椿・楓・つ、じなどの散りやすい花や萎れやすい花

を嫌うとあるように、生けられる花はその場に相応しい特徴の

花が選ばれる。『花道全書』卷五「椿の花生様の事」に「暖気

に成ては不意にぬけて落るもの也。しかるゆへに出陣首途出家

の入院に用ざる也。新敷花ならば落もすまじけれ共世にその

唱^なへあるゆへ用がたき也」とあるように、その配慮には万全が

期されているが、花そのものの特徴に対する配慮だけではなく

名前への配慮もなされている。『仙伝抄』に出陣の時に生けて

良いのは「かつ木、常磐なる物。婦り花」とあったが、『華道

全書』卷五「時ならぬ花の事」の条にも、

時ならぬ花も遅れ咲きなどに折節有る事也。見事なりとも

生くべからず。長春はとこしなへの春といふ文字ゆへ是は

いつ生けてもくるしからず。杜若も四季咲きといふ名あるゆへ苦しからず。金盞花も常に咲く物なるゆへ生くる也。

と見える。「帰り花」もまたこの名によつて病人本復の祝いなどの祝儀には用いられ、婚礼・仏事には忌まれるのである。⁽¹⁵⁾

『実隆卿公記』に見える「室町殿」（足利義尚か）に送られた海菜の「帰り花」や、『天王寺屋会記』の茶席の主客が武将の三好山城守（康長）、宮法（松井友閑）、道薫（荒木村重）である④⑤⑥に用いられた山吹や梅の「帰り花」は出陣していく者に対する無事帰還を祈る意か、あるいは政治的社会的に復権を果たしたことに對する祝意が込められたものと推測される。⁽¹⁶⁾

ところで、『松下集』の「帰り花」は秋に咲いた桜であり、『実隆卿公記』の例は七月の海菜と九月の桜であり、『天王寺屋会記』では①の十二月（前後の茶会日から考えると十一月か）の桃、②③の六月の藤、④⑤の八月また九月の山吹、⑥の九月の梅が「帰り花」とされている。したがつて、「帰り花」は特定の季節や花に限定されるものではない。ただし、後には『数奇之書古織部伝』には「帰り花トテ、春夏秋咲（く）花ノ秋冬自然ニ咲事、草木トモ在レ之。」とあり、一つの季節を挟んで咲く花とされるようになり、さらに次節で見る俳諧では冬の季

語となる。

5 俳諧の「帰り花」

連歌は王朝和歌の世界に機知と諧謔を吹き込んだ庶民的な文学でありながら、「三代集・源氏の物語・伊勢物語・名所の歌枕、かやうの類を披見して有興さまにとりなすべし」（二条良基『連理秘抄』）などあるように、その題材も言葉も王朝的なものであつた。しかし、その連歌から成立した俳諧は、和歌や連歌とは異なり、俳言と呼ばれる俗語が用いられる。「帰り花」も連歌には見られず（勢田勝郭編『連歌の新研究 索引編』「七賢の部」「宗祇の部」「首柏・宗長の部」の調査による）、俳諧には現れる言葉である。俳諧歳時記の類に「帰り花」が現れるのは斎藤徳元編『俳諧初学抄』（寛永十八年一六四一刊）が最も早い、松江重頼編輯『毛吹草』（正保二年一六四五刊）では「連歌四季之詞」には見えず、「俳諧四季之詞」に現れ、「横題」（俳諧にのみ用いられた季語）とする（北村季吟著『増山井』寛文三年一六六三刊にも同様の意味の「俳」の注がある）。曲亭馬琴編『増補俳諧歳時記』（嘉永四年一八五一刊）に「帰花 冬月諸木或は草の花ひろく事あり。これを帰花とい

ふ。正花になるなり」とあるが、「正花」とはその時節の花として扱うということであろうか。

当初、俳諧の「帰り花」は次のように諧謔が含まれているものがある。

みてからに春の気になるかへり花

〔住吉をどり〕元禄九年一六九五

咲過ぎて春を減らすな帰花

〔横井也有〕『蘿葉集』明和四年一七六七

時雨にも少し思あり帰り花

〔同右〕

霜白し鳥のかしら帰り花

言水

〔俳諧五子稿〕安永四年一七七五

また、可笑みを含んで老人の再婚や恋に譬えて言うこともあ
る。

髪つんで殿はづかしや帰り花

〔ななついろは〕宝永二年一七〇五

帰花祖父が恋の姿から

〔暁台〕『暁台句集』文化六年一八〇九

鳥飼洞齋編『改正月令博物筌』（文化五年一八〇八）では

「忘れ咲き・かたはな・狂花」の別名を紹介しつつ、「帰り

花」を「尋常の花とはかじけて賞するに足らず」と評している（「かじく」は生氣を失うこと）。しかし、芭蕉の句での「帰り花」にはこれらとは異なるものがある。長谷川權氏は俳句の「帰り花」について「万物が枯れ急ぐ天地のそこだけがぼつと明るんでいるような感じ。これが本意です」と言われ、具体例にそって次のように説明されている。

凧に匂ひやつけし帰り花

芭蕉

句中の切れのある一物仕立て。「匂ひや」の「や」は問いかけの「や」で、ここで切れるわけではありません。むしろ「つけし」のあとで切れる。凧に匂いをつけたみたいだね、帰り花は、ということです。（中略）

約束のごとくに二つ返り花

倉田絃文

句中に切れ字のある一物仕立て。この句は帰り花が約束したように二つ咲いているということです。この「帰り花」にはそつと置いた感じがあります。

帰り花という季語は、このそつと添える感じが大事です。

なぜなら、帰り花はそつと咲くからです。自然の姿をこわさないよう、そのまま写してやればいい。

確かに、芭蕉の「帰り花」は返り咲きの花といった捉え方は

されていない。帰り花という語こそ用いられているが、その季節のものとして捉えている。芭蕉は「見るにあり、聞くにあり、作者感ずるや句となる所は、即ち俳諧の誠なり」(『三冊子』)と言つてゐるが、そうしたことと「帰り花」の捉え方は関係するものと思われる。次のような「帰り花」も同様であろう。

夢に似てうつつも白し帰り花

蓼太

像に声あれくち葉の中に帰り花

素堂

片枝は雪に残して帰り花

蕪村

中世の辞書には「帰り花」は見られないが、『書言字考節用集』(元禄十二年一六九九年・享保二年版)には「復花」が見え、広く知られる言葉となつていったようである。元禄十四年一七〇一に各務支考によつて芭蕉七回忌法会の記念の俳諧追善集『帰花』が編まれているが、この頃、歌舞伎でも宝永三年一七〇六に京都の早雲座が『栄花熊谷桜』を、江戸では山村座が『帰花武勇鏡』を上演している(『役者友吟味』竹島幸左衛門の条。「栄花」の振り仮名「かへり」は宝永四年刊八文字屋八左衛門板「歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』岩波書店」による)。俳人でもある井原西鶴(一六四二—一六九三)の浮世草子に「帰り花」が見えるのはこれより少し

前のことである。

有時、長田山の西念寺の庭に復花咲て家中春の心になりて見にまかりぬ (『男色大鑑』卷三貞享四年一六八七刊)

元服はむかしに帰り花咲

(『武家義理物語』卷四「目録」…元禄元年一六八八刊)

ちなみに西鶴は次のように「返り咲き(の花)」の語も用いている。

其頃は咄作りて、点取の勝負はやりしに、おりふしの兼題に「還咲の花の陰に、哀に可レ惜物」

(『本朝二十不幸』卷一、貞享三年一六八六刊)

江戸桜のかへり咲

(『西鶴置土産』卷二「目録」元禄六年一六九三刊)

うへ野の桜かへり咲して、折ふしの淋しきに、是は春の心して見にゆく人袖の寒風をいとはず、何ぞといへば人の山、静なるお江戸の時めきける (同右卷二)

あとがき

季節はずれに咲いた花は、上代においては季節に先駆けて咲くめでたい存在としても捉えられていた。王朝和歌では過ぎぬ

く季節を惜しむ象徴となり、中世の生け花では客人をもてなす心を託すものとなり、近世の蕉風俳諧ではそのものをそのものとして鑑賞する対象となった。文献に現れてくるもので見るかぎり、そのように捉えられるが、それぞれの時代にそれ以外の捉え方がなされていなかっただけは分からない。ただ、現代の我々にはそのすべての捉え方を理解し、共感することができる。あるいはそれぞれの時代に見出された花の魅力が今の私たちに重層的に積み重なっているのかもしれない。

ところで、わが国の美意識に大きな影響を与えた中国では季節はずれの花をどのように捉えているのであろう。

漢語にも「帰華」があるが、これは「散つて地に帰る花。落花」(『大漢和辞典』)の意であり、「帰り花」ではない。「還花」また「復花」の字面は漢語には見あたらない。「褪花」が「帰り花」と説明されることがある。

榴無多子否 桃与褪花殊 ；褪花ト云ハ、カヘリバナト云テ、ボケザキトテ、秋サクク花ヲ云ソ。

(『湯山聯句鈔』明成九年一五〇〇)
東坡詩の註に曰、(師説云、阿馱波奈、又云加倍利波奈)

△和俗の冬月のころはひ、諸木あるいは草類の花開くをす

べてくかへりはなくと称す。中華にいふ(狂花)また(褪花)の類なり。俳道に用ひ、すなはち正花に用ゆ。一木一草に限らざるゆゑなり。

(其諺編『滑稽雑談』正徳三年一七一三)
この「褪花」は辞書類には見えないが、「褪英」と同じく(『剪燈餘話』「褪英浮三雨潤、殘蕊漾風潮」)、文字通り色あせた花びらの意味であらう。

漢語で、実態として「帰り花」と同じく季節はずれに咲いた花を意味するのは「反花」「狂花」であらう。しかし、「反花」は、『古今律歴考』に

三十有三年冬十有二月。隕霜不殺草李梅実。
周之十二月。夏之十月也。十月霜宜殺草。而不殺李梅。
宜下剥落反花而再実上。皆冬煖之咎徴也。

(卷四、經五・春秋考・僖公)
の例を見出せるだけであるが、凶兆としての存在であり、削ぎ落とすべきものとされる。「狂花」の例は多く見られ、白楽天の作品にも、

十月江南天氣好 可憐冬景似春華
霜輕未殺蕪蕪華 日暖初乾漠漠沙

老栢葉黃如嫩樹

寒桜枝白是狂花

此時卻羨閒人醉

五馬無由入酒屋

〔赴杭州路中作〕

などの例がある。この「狂花」も『四海入海』（天文四年一五三五刊）に「狂花ト云ハ、桃李ノ冬花サイタリスル類ゾ。カヘリ花ゾ。」（十二ノ二）、『生花伝小鏡集』（小細流生花口伝書）に「狂花かへりばな」とあつて「帰り花」と同じとされる。しかし、中国では「搜神記」に、

太興四年。王敦在武昌。鈴下儀杖生花。如蓮花。

五六日而萎落。説曰。易説枯楊生花。何可レ久也。今狂花

生枯木。又在鈴閣之間。言威儀之富。榮華之盛。皆

如狂花之發。不レ可レ久也。其後。王敦終以逆命。加

戮其戸。

（卷七）

とあるように、「反花」と同じく凶兆とされた例が見える。これは徐光啓の『農業全書』に、

齊民要術曰（中略）正月一日日出時。反斧班駁椎之。名

嫁槩。候大蚕入レ簾。以杖擊其枝間。振落狂花。

全赤即収。

（卷二十九、樹芸・果部上）

とあつて、咲いて実らず、結果的に徒花あだばなとなるものであり、振

帰り花

い落とすべきものとされることと関係があらう。²⁰⁾

和語の「帰り花」と漢語の「反花」「狂花」は実態は同じものである。しかし、その捉え方は異なる。少なくとも俳諧の季語としての「帰り花」には季節はずれであっても、その季節の景物として愛賞する心がある。それは「時の花」の華やかさはないが、その慎ましやかな花の在り方もまた、我々の共感するところである。

注

(1) 拙稿「花はな曆れき」〔同志社女子大学文学研究科紀要〕第十一号二〇一・三

(2) 本稿をなすにあたって調査した江戸時代以前のものには以下のとおりである。

【和歌】萬葉集・勅撰八代集、それ以外の私家集・歌合集などは必要に応じて調査した。

【物語】伊勢物語・大和物語・平中物語・塗物語・竹取物語・宇津保物語・落窪物語・源氏物語・狭衣物語・堤中納言物語・浜松中納言物語・夜の寝覚・住吉物語・松浦宮物語・小夜衣・この時の時雨

【日記紀行文】蜻蛉日記・枕草子・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・建礼門院右京大夫集・高倉院殿島御幸記・高倉院升遷

記・海道記・東関紀行・うたたね・十六夜日記・中務内侍日記・竹むきが記・都のつと・小鳥のくちずさみ・藤河の記・筑紫道記・北国紀行・宗祇終焉記・佐野のわたり・いほぬし

【隨筆・批評】徒然草・方丈記・無名草子

【歴史物語】古事記・日本書紀・栄花物語・大鏡・今鏡・水鏡・増鏡

【説話集】宇治拾遺物語・今昔物語集・無名抄・閑居友・選集抄・打聞集・古今著聞集・古事談・十訓抄

【軍記物語】平家物語・太平記

【お伽草子】あしびき・鴉鷲物語・伊吹童子・岩屋の草子・転寝草紙・かざしの姫君・雁の草子・高野物語・小男の草子・西行・さ・やき竹・猿り草子・しぐれ・大黒舞・依藤太物語・毘沙門の本地・弁慶物語・窓の教・乳母の草紙・師門物語、

【謡曲】日本古典文学全集『謡曲集一・二』収集の脛能八曲・修羅物八曲・蔓物十八曲・四番目物二十八曲・切能十五曲

【狂言】日本古典文学全集『狂言集』所収の四十番。

【その他】茶道・花道関係のものは『茶道古典全集』（淡交新社）、『花道古書集成（正・続）』（思文閣）所収のもの。また、『実隆公記』は続群書類従完成会刊による。

(3) 『中世の文学 歌論集二』（三弥井書店一九六一・二）「古来風体抄」補注による。

(4) たとえば『無名抄』（題心事）には次のようにある。

歌は題の心をよくよく心うべき也。俊頼髄脳といふ物にぞしるして侍る。(中略) 又題の歌は、かならず心ざしをふかくよむべし。たとへば、いはひにはかぎりなく久しき心をいひ、こひにはわりなく浅からぬよしをよみ、もしは命にかへて花ををしみ、家ぢをわすれて紅葉を尋ねんごとく、その物に心ざしふかくよむべし。

：題をばかならずもてなすべきぞとて、ふるくよまぬほどのことをば、心すべし。うくひすは、まつ心をはよめども、たづねてきくこといとよまず。又しかのねなどは、聞くに物すくあはれなるよしをばよめども、待つよしをばいとみはず。かやうのことなどは、ことなる秀句などなくば、かならずさるべし。又桜をばたづぬれども、柳をばたづねず。はつ雪などをば待つ心をよみて、しぐれあられなどをばまたず。花をば命にかへてをしめども、紅葉をばさほどにはをします。これらのちがひめを心えねば、故実をしらぬやうなり。よくよく古歌などを思ひときて、歌の様程にしたがひて、相はからふべき事なり。

(5) 「残花」には

四月、祭の日まで花ちり残りて侍ける年、その花を
使少将のかざしにたまふ葉に書きつけ侍る 紫式部
神世にはありもやしけん桜花けふのかざしにおれるためしは

(新古今集・雑一四八五)
といった即興の風雅の材料となつたものもあるが、このような例は勅撰八代和歌集では右の一例だけである。

(6) トコナツ(常夏・瞿麦)に

源正明の朝臣、十月許に、常夏を折りて、贈りて侍りければ、冬なれど君が垣ほに咲きければむべ常夏と恋しかりけり

(後撰集・一〇六九)

などの例が見えるが、

常夏の花をし見ればうちはへて過ぐる月日の数も知られず

(拾遺集・一〇七九)

などの例もあるように、この花は長く咲き続ける花であり、季節はずれの花として扱われたものではない(拙稿「常夏花譜——ナアシコの異名について——」)「同志社女子大学大学院 文学研究科 紀要」第二号二〇〇二・三)

(7) 次の例は季節はずれに咲いた花の例にはならないであろう。

わが宿の池の藤波さきにけり山郭公やまほととぎすいつか来鳴かむ

(古今集・夏・二二三五)

藤は晩春の花とされており、この藤も季節どおりに咲いているのであり、夏の景物のホトトギスと関連づけて、春から夏への変化をスムーズにするために、夏の部に置かれたものと考えられる。

(8) 注③に同じ。

(9) 注③に同じ。

(10) 『夫木和歌集』(鎌倉後期) 巻四に

散る花を吹きあげの浜の風ならば猶も木末にかへりさかせよ

(小侍従)

帰り花

とあり、『実隆卿公記』延徳三年(一九二)十一月二十七日条に

月次和漢御会也(中略)

ちる花を枝にかへすや木々の雪

近衛前白

(11) ただし、この頃(南北朝・室町時代)の辞書類(『頓要集』・『撮

壤集』・『温故知新書』・『運歩色葉集』・『節用集』・『下学集』)に

は「帰り花」は見られない、「残花」は「頓要集」に見える。

(12) 江戸期にも『宗春翁茶道聞書』(慶長五年一六〇〇奥書)に「返のはなハ事によりて入る事あり」、「増補和訓栞」に「宗吾記に、送り花の事、梅海棠云々、時によりて梅のかへり花をもやる」とある(宗吾記は未詳)。

(13) 造形意匠の一つに「帰り花」がある。蓮華の花弁が下向きになっ

ている彫文であり、「反花」とも言い、請花うけはな(受花)に対する。

『君台観左右帳記』(日本思想大系『古代中世芸術論』所収)の「彫物之事」に「小盆に帰花重宝也」「帰花薬器」など見えるものであるが、『天王寺屋会記(宗及他会記)』(永禄四年四月十三日)の「水指 かへり花」、「今井宗久茶湯日記抜書」(弘治四年一五八正月五日 物外軒御会)の「水サシ カへり花、アカ、ネ」などはその例である。

(14) 奥書に三条家の秘本を文安二年(一四四五)に富阿弥が相伝し、

さらに数人を経て天文五年(一五五六)に池坊専慈が相伝したとあり、室町時代もしくはそれ以前に成立したと考えられている。

引用は『花道古書集成』第四卷（東洋文庫蔵・古活字版）による。ただし、表記を変えて読みやすくした箇所がある。

- (15) 引用は日本思想大系『古代中世芸術論』所収のものによる。この底本は大永三年一五二三相伝の東京国立博物館所蔵『君台観左右帳記』であるが、天文十一年一五四二相伝のものを底本とする続群書類従本には「帰花をば祝儀に用ひ、残花をば嫌ふなり。」とある。

- (16) 『仙伝抄』『立花初心抄』『華道全書』に婚礼には「帰り花」は用いないとあつたが、『臥雲華書』（江戸初期成、宮内庁書陵部蔵）には「帰」は「嫁」の意味でもあるところから、嫁取りにも用いられるとする（この資料については池坊由紀氏より御教授いただいた）。

帰花をハ祝儀に用べし。残花をハ嫌ふ也。帰花ハ再び花咲故に祝儀也。殊嫁取などの時の花ニ用べし。古語に婦人謂レ嫁、曰レ帰^{トッテ}。言^{コト}、女人適^{シテ}夫^ニ家^ニ如^レ帰^ニ己^ノ家^ニ。故、云^フ帰也と云り。残花ハ死花也。終る花をハ祝儀ニハことに用べからず。

- (17) 『教奇之書古織部伝』に「帰り花トテ、春夏秋咲花ノ秋冬自然ニ咲事、草木トモ在レ之。」とある。また、『花道全集』（昭和二十四年三月、河原書店刊）の第五卷「立花と茶花」（亀沢香雨氏執筆「立花と植物」）にも次のように纏められている。

かへり花の事、悉く嫌うというのではないが、婚礼の華、病

氣本復の華などには嫌ふ。かへり花というのは春の花が秋の末に咲き、夏の花を冬にみるをいふ。

おくれ花の事、これも悉く嫌うというのではないが、折袴の華、官位についての華、入院の華、移徒の華等に嫌ふ。残花も同様である。然し残花というのは、早咲き、おそ咲、漸く咲き終り、未だ悉く散り果てぬうちにあるを残花と云ひ、おくれ咲とは春の花夏に至つて咲くものの如きをいうのである。古今の花の事、古とは返り咲きとおくれ咲きのことである。譬へば春のころにて夏用ひるは季過ぎて昔となりこれを嫌う。当季の花を今とすることによつて古今の名がある。

- (18) 例えば頼原退蔵『芭蕉講話』（新日本図書株式会社一九四六・七）に、芭蕉の「姥桜咲くや老後の思い出」の「姥桜」について次のようにある（十一頁）。

和歌や連歌だと、万葉集だとか古今集だとか、源氏物語だとか、そんな古い和歌や物語を典故として作る。俳諧はもつと通俗的な謡曲を盛んに用いる。姥桜などという通俗的な名をもつた桜も、今まで和歌や連歌では題材とされなかつた。

- (19) 「実作への葉」『角川俳句大歳時記』付録、ちなみに太田蜀山人『平日閑話』に、

当月（引用者注、明和九年一七七二 八月）末より紅梅、梨桜、李の類花開く事春の如し。上野山門際の桜悉く開く。尋常の帰り花に異なり。信州善光寺より便あるに、彼国にても

紅梅、彼岸桜など花咲き候よし。

とあるが、帰り花は一輪二輪ひっそりと咲くものであり、このように咲くのは例外である。

(20) この節の漢籍の例は中国からの留学生李増生君の調査を参考にした。明記して感謝の意を表します。